

## ある野外コンサート たなか踏基

最近、私は何故か深夜に眼が醒めるようになった。特に就寝前に酒を飲んだ日が多い。膀胱が排尿の衝動を感じ、注意を喚起するある種老化現象の兆しであろうか？その日も焼酎のお湯割りを多目に載いて床に就いた。午前二時を廻るころ、ふと目覚めてまたトイレに起きてしまった。何気なく点けたNHKB S衛星第2TVから、聞き覚えのあるサウンドが流れ、大きな森に囲まれた丘陵の画像が映し出されていた。

「これはジョージ・ガーシュインだ！」

広大な森の一角に切り開かれ、緑色の屋根をした異国の野外円形劇場にカメラはパノで寄って行った。身体を揺する仕草と、時折髪を掻き揚げては首を傾けながら棒を振る、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者は、まぎれもなき「世界のオザワ」小澤征爾の勇姿に違いない。丘には、思い想いの姿勢でくつろぐ、二万人以上の群集がいた。カメラは、ピクニック・バスケットやクッション、毛布などを持って、幼い子供を交えて憩う老若男女の姿を映し出していった。それが、ベルリン郊外にある今大人気のヴァルトビューネ野外音楽堂であると後で知った。曲目は小澤征爾指揮の「パリのアメリカ人」である。それにしては、ステージ全面の、ドラムセットとグラランドピアノが奇異だった。でもその準備の意味が、直ぐに私には理解できた。三人の黒人演奏者が、晴がましく舞台の袖で出番を待っていたからだ。

一曲目が終えて退場した小澤征爾が、今度は一人の黒眼鏡の黒人の腕を取るようにして、介添えしながら再登場してきた。あとに従う二人はベースのローランド・ゲリンとドラマーのジェイソン・マルサリスで、ピアノの前に誘導された

盲目の演奏家こそ、マーク・ロバーツその人であった。二曲目は「ラプソディ・インブルー」で、あの独特のクラリネットのグリッサンド奏法で曲は始まった。ジャズとクラシックの熱い融合、正にピアノトリオとベルリンフィルの間に繰り上げられた、丁々発止の興味深いジャムセッションでもあり、ウィーン国立歌劇場音楽監督の「世界のオザワ」の心肉い粹な演出でもあった。

曲目は次の順序で演奏された。

パリのアメリカ人（管弦楽）

ラプソディ・イン・ブルー（共演）

ピアノ協奏曲へ調（共演）

コール・アフター・ミッドナイト（Pトリオ）

ストライク・アップ・ザ・バンド（管弦楽）

アイ・ガット・リズム（Pトリオ）

ベルリンの風（管弦楽、作曲：パウル・リンケ）

初夏の気軽なベルリン風物詩のごとき、日没前後の時間を挿んで進行するコンサート、ドイツの森の野外劇場に織り成す幻想的な光の彩、森の木々のさざめきと群集の中で明滅する蠟燭の灯り……。それは、日本では考えられない、とてもロマンティックな雰囲気の中で進行する、ある面羨ましいほどに警戒な野外コンサートであった。

Pトリオとベルリンフィルの共演では、時にジャズがクラシックを呑み込む場面を観た。マーク・ロバーツの鍵盤上を走る指から、自由奔放なアド

リブの調べが無限に弾きだされた。熱狂した聴衆は、口笛を吹いて全盲のジャズピアノリストの演奏に呼応した。ジャズの領域、クラシック管弦楽の限界をそこに感じさせていた。Pトリオの独壇場は、ジャズの名曲「アイ・ガット・リズム」でも遺憾なく発揮された。しかし最後は、クラシックが見事に巻返していた。何といても聴衆を酔わせたのは、圧巻の「ベルリンの風」である。聴衆は「世界のオザワ」に促されるように、全員が総立ちとなって曲に合わせて足を踏み鳴らし、手拍子をとって指笛を鳴らし、子供を肩車して場内を踊り回った。あたかも、ドイツの夜の帳の中で、二万人を呑み込んだ「深い森の舞台」全体が、歓喜と興奮の増埒と化して大きく揺れていたからだ。

ジョージ・ガーシュイン（一八九八—一九三七）

と言えば、クラシック、舞台演劇、ポップス界を股にかけて活躍したアメリカが生んだ大作曲家である。ラグタイムからジャズへの黒人音楽をこよなく愛し、一九一九年「ワシントン・スワニー」の大ヒットが転機となって世に出た人として知られている。トイレのついでに、かくして深夜の午前二時から四時まで、二〇〇三年六月二十九日収録の野外コンサート映像を、私は感涙しながら観るはめとなった。早朝新聞で確認すると、やはり「ピクニックコンサート」と番組欄に記されていた。

折りしも、マリナーズのイチロー選手が、年間安打数でジョージ・シスラーの84年前の257本にあと一本と手をかけ、前人未踏の259本の新記録樹立という歴史的快挙がシアトルから報じられる十数時間前、十月二日のBS深夜放送のできごとであった。

了